
輪廻の終演

朝倉 純一

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輪廻の終演

【Nコード】

N0679B

【作者名】

朝倉 純一

【あらすじ】

私立鳳南学園に通う長谷拓磨と和宮佳奈は、ある日非日常的な出来事に巻き込まれた。佳奈は拓磨を助ける為に犠牲となり、拓磨は佳奈を助けるために死力を尽くす！拓磨は終わりなき戦いを終わらせることができるのか！

第一章く出会いく（前書き）

この作品はフィクションです。作品中に出る人物、建物、地名等は現実のものとは異なります。

第一章　出会い

タツタツタツタ

月明かりの下を駆ける足音が一定のリズムで鳴り響く
タツタツタツタン

軽く跳躍をする。夜空に舞うその姿は見る者を釘付けにしてしまう
ほど華麗であった。

1話　平穏な朝（仮）

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

目覚まし時計の規則正しい機械音が部屋の静寂を打ち破り音を響か
せる

「んー」

目覚ましの音が耳に響き朝の訪れを痛感する。オレ^{ハセ}長谷拓磨^{タクマ}が深淵
より帰還した証でもある。

ピ。ピ。ピ。

「バンッ！」

目覚ましのスイッチを叩き押し

「んー朝かー」

（起きろ。起きろ）

心の中で自分に言い聞かせて、ガバツと布団をはねのけ立ち上がった。
そしてそのまま窓に向かい歩いて行き窓を開けた。

「んー。…今日は快晴だなー、朝日が目に染みるぜえ」

窓辺で両手を上げながら背伸びをし体を後ろに反らして朝の空気を
肺一杯に吸い込む。

「ふー、充電完了！今日もお勤め頑張るか！」
そう言って制服に着替え始めた

台所に行くToastと目玉焼きが置いてあった。

「…何で家の朝はToastなんだろうか…。漫画じゃあるまいし…。」

ふー。と息を吐きながら椅子に座りパンをかじった。

モグモグ…

パンを食べることに集中し黙々とパンをかじる

「…ふー」

トーストを食べ終わり、一息ついてから目玉焼きを口に押し込み席を立ち部屋に戻った。

自室に戻って時計を見るとそろそろ行かないと遅刻してしまう時間だった、カバンを取って玄関に急いで行き靴を履いて家を出た。

「行つてきます。」

ミャー

「ん？」

家を出て少し歩くと猫の鳴き声が聞こえてきた。何気なく鳴き声が聞こえた方を見てみると道路の端の方に猫が横たわっており、その脇で子猫が動かない猫を前足で揺すっていた。

「……………」おそらくは親猫であるその猫の体には車のタイヤに退かれたと思われるあとが見て取れた。

(……)

オレは猫の側に行き優しく子猫の頭を撫でた。

ミャー

「ココに居たら危ないから一緒に来い。」

そう言つて親猫を抱き上げ通学路を大きくそれて歩き出した。子猫もそれに合わせ付いて来た。

「この辺で良いかなー。」

少し歩くと山の近くにある神社の鳥居の前に着いた。

「境内に埋めるのはマズいだろなあ。…そもそも神社に埋めるの

はダメなのかな？……まあ鳥居から少し離せば大丈夫だろ。」

「…一応この辺一帯も神社の敷地なんだけどね。」

（ん？）

後ろから女性の声が聞こえたので体ごと振り返った。

「……………」

後ろにはオレが通っている学校の制服をきた女子生徒が居た。

「えっと。…おはようございます。」

オレが通っている学校、私立鳳南学園　ホウナンガクエン　では、女子は制服のリボンの色で学年を表している。そしてこの女性はオレより上の学年だった。

「……………」

（ん？）

表情は笑顔、だが少し引きつったような表情を浮かべている少々不思議な表情だった

「…どうかしましたか？」

とりあえずそう一言言ってみると、俺の腹辺りに目を落としたので俺は理解した。

「…コイツ道路で跳ねられていたんです…。それでここまで連れて来たんですけど、やっぱりこの辺りに埋めるのは…ダメですか？」

……

少しの間が出来たのもう一度聞こうかと思いい口を開きかけたとき、啞然とした表情が満面の笑みに変わり…

「良いわよ！OK！その子のお墓作ってあげましょう！」

妙にウキウキした調子で勝手なことを言ってる気がしたので…。

「…一応オレ神主さんに聞いてきますよ。」

と、オレが素っ気なく言ってみると、ムツと表情を変えて不機嫌気味になってしまった。

「私が良いって言ったら良いのよ！文句なんて言わせないわ！」

…なかなかムチャクチャなことを言ってるな〜と、考えていると…。
「だいたい此処は私の家なんですから！」

つと、一言

（ああ、なるほどね。…何かあんまし説得力ないな）

「……佳奈？何騒いでるの？学校はどうしたの？」

階段の上の方、境内から柔らかな声が聞こえてきた

（巫女さんか？佳奈？この人かな？じゃ本当に神社の娘か…）

「すぐに行きまゝす。」

佳奈と呼ばれた女子生徒はそう言ってこちらをチラッと見てから

「お母さんー、ココに猫さんのお墓作って良いー？」

「猫さん？」

お母さんと呼ばれた巫女服の女性が小走りに階段を降りて来る。

「どうしたの？猫さんって？」

巫女さんは佳奈を見たあとオレの方を見てすぐに状況を理解してくれたようだ。すごく悲しそうな表情からこの人の優しさが伝わってくるのが分かった

「猫さんが道路に跳ねられていたんだって。それでそのままには出来ないから此处まで連れて来たらしいわ。」

「まあ。」

そしてオレの方を見て娘同様満面の笑みを見せてくれる。

「あらあら、制服が汚れてるわよ。それに今日は学校でしょ？」

佳奈と話している時はふんわりとしたイメージがあったがオレに対しての言葉使いは巫女としてか又は大人としての言葉だった。

「大丈夫ですよ。学校に着いたらジャージに着替えますから。それに遅刻は覚悟の上です。」

オレがキツパリ言うとう優しい笑顔を向けてくれた。

「あらあら。不良さんねー、計画犯なんて。」

ニコニコしながら努めてイジワルな事を言いオレに両手を差し出した。

「…えつと？」

オレが何事かと思っていると、ふふつと笑いながら

「学生さんは学校に行かないと駄目ですよ。猫さんは私に任せて良いですから。」

そう言つてオレから猫を取り上げた。服が汚れることを気にもせず、当たり前のことをするかのような自然な動作にオレは啞然としてしまった。

ミヤー、ミヤー

今までずっとオレの後ろで大人しくしていた子猫が親猫の方を見上げて鳴いた。

「あら、子猫さん？この子の子供かしら？」

巫女さんは自分の腕に抱いている親猫を示しオレに聞いてきた。

「そうだと思います。その猫の近くに居ましたから、危ないと思つて連れて来てたんですけど…」

オレが子猫をどうするか考えていると

「境内で飼えば良いんじゃない？」

つと佳奈がいつの間にか子猫の頭を撫でながら言つてきた

「そうね、この子も一人は寂しいでしょうし、そうしましょう」

「…えっ？」

さも当然と言わんばかりにそう言われてオレはまた啞然とした

「えつと、その…」

「心配しなくてもお友達もたくさん居ますよ。安心して預けて下さいね。」

…どうやらオレが子猫が寂しい思いをしないか心配したと思つているらしかつた…。

「…あなた家の境内に來たこと無いの？」

オレが考えていると佳奈がそう言つてきた

「えっ？…無いですよ。」

思えば一度も神社に行つた覚えがなかつた…

オレがそう言つと佳奈がへへ、と珍しそうにオレの顔を見てきた

「この町に住んで居る人で家の神社に來たことが無い人はたぶん珍しいわよ。…ねえー」

佳奈が子猫の頭を撫でながら言ってきた。ちなみに最後のは子猫に
対するものだ

「…と言つかオレ今まで神社に訪れたことが無いですから」
と、一応伝えてみた

「あら、そうなんですか？珍しいですね。」

佳奈のお母さんが笑顔で応えてくれた。

「でも、小学生のときとか来なかったの？遊びとかで。それに町の
行事で此処を使うことあるわよ？」

「うーん。…無いですね。」

全く覚えてないのだから仕方がない

「まあ別に良いけどね。取りあえずこの子が寂しい思いをすること
はないわよ。お母さんも居るしね。」

子猫の下顎辺りを撫でながら言ってきた

「うーん…、学校に連れて行く訳には行かないですし、お願い出来
ますか？」

オレは佳奈のお母さんに向かって頭を下げた。

「あらあら、そんな頭を下げないで。私も猫さんと仲良くなりたい
から気にしないでね。」

そう言って笑みを見せてくれたおかげでオレは少し楽になれた

「ではよろしく願います。帰りに寄ります」

そう言ってまた頭を下げたオレに優しい笑みで応えてくれた

「ほら、早く行かないと遅刻ですよー。学生は勉強に励みなさい。

ほら、佳奈、貴女も早く行きなさい。」

「はい。…じゃあ行きましょるか、後輩くん。」

佳奈はそう言って学園に向かって歩き始めた。オレはもう一度佳奈
のお母さんに頭を下げ神社を後にした。

第一章く出会いく（後書き）

こんにちは。

初めて書いた小説なのでいろいろ不安があります。でも、皆さんに楽しんでもらうために私なりに頑張って連載させて行くつもりなので、どうかよろしくお願いします。

第2話：恩返し

オレは今学校に向かって歩いてるのか、それともどこか別の場所に向かっているのだろうか…。

神社から学校への行き方はオレはあまり知らない、だから佳奈の後ろを付いて行くわけだが、なぜか舗装された道を歩かず山道に近い道を歩いてる。しかも、遅刻ギリギリの時間帯だから走った方が良いに決まってるのだが、走る気はないようだ…

（これじゃ何のために佳奈のお母さんが猫のことを全部引き受けてオレたちを学校に送りだしてくれたのか分からんな…）

今更引き返していつもの通学路に行くわけにもいかずオレは佳奈を信じて付いて行くしかなかった。

「……大丈夫よ。」

いきなり佳奈がそう言ったので、オレは口に出していたのかと思った。

「…えっと、…何がですか？」

「心配しなくても学校には着くわ、遅刻もしないでね。…この道が学校への一番の近道なのよ。」

オレが不安に思っていると思うと言ったようだった。

「…いつもこの道を通るんですか？…佳奈さんは」

オレがそう言うのと今までオレの前を振り返りもせず歩いていた佳奈がオレの横に並んで歩き出した

「…さん付けは止めてね、馴れてないか恥ずかしいわ。…この道は遅刻しそうな時だけ使うの、いつもはちゃんと舗装されてる歩道を使うわ。」

「ちゃんと」と言うところを強調して答えてくれた。

「…あとのくらいで学校に着きますか？」

自分でも無粋な質問をしたなと思ったが、自分の居る場所がそれだけ特殊な場所だから仕方がないのかも知れない。

「…そうねー。あと20秒ぐらいかしら」

「えっ、20秒？」

思わず聞き返してしまった。オレが居るのは簡単に言っただけの中、近くに建物は見えないし、ましてこの森林を20秒で抜けるのでさえ無理がありそうだったからだ。

「このまま真っ直ぐ行くと学校の裏に出るわ。学校の裏に深林って呼ばれる森があるの知ってるでしょ？そこに出るのよ」「えっ！！…深林は知ってますけど、あそこはそんなに広いわけでもないのに特殊な地形のせいか、いくら進んでも抜けることが出来ず一般人、生徒の出入りを禁止されてる場所ですよ。」

深林は特殊な地形で入ると抜けないが、元の場所に戻るならさほど苦労せず帰ると言う。一説では、入ると一定の場所をグルグル回ることになるらしい。深林の中では方向感覚が狂い意識して歩こうとも同じ道を進むことになるらしい。そして、逆に元の場所に戻るには、意識せずとも単に回れ右をして歩き出せば元の場所に行き着くと言う。

「ええ、でも私は長年この深林で遊んでいたから木々の違いや雰囲気でちゃんと真っ直ぐ歩けるの。そしてこの深林と家の神社の裏山が繋がっているのよ。……さあ、着いたわよ。」

「えっ、あ。」

佳奈がそう言ったので前を見てみると本当に学校の裏に着いていた。予鈴もまだみたいだ。

「まさか本当に深林を抜ける何て…」

深林を道具なしで抜けた人は居ないと言われている。深林の中ではコンパスでさえ狂うため、それなりの準備がいると言う話を聞いたことがある。

「予鈴まで4、5分あるから早く行っただけ替えなさいな。それとこのことは他言無用でお願いね。」

佳奈は得意げな顔をしながらそう言い校舎に向かい歩き出した。確かに深林を道具なしで抜けることは凄いことだ。しかし、だからこ

そ、このことは秘密にしなければならぬことのはずだ…。

「…ッありがとうございます！おかげで遅刻せずにすみました。」
オレは佳奈に向かって頭下げた、秘密をバラしてまで間に合わせてくれたからだ。オレがこの格好で授業を受けないでいいようにするためだろうと思う。

「猫さんからの恩返しだよミャー」

佳奈はそう言うところりと振り返り笑顔を向けてくれた。そして校舎の中に消えてしまった。

（本ッ当、親子揃って良い人たちだな。）

「…おっと！急がんとせつかくの好意が無駄になる！！」

オレはそう言うのと急いで教室に向かい駆け出した。

キーンーコンーカ…。

ギリギリ予鈴が鳴るまでに着替えることが出来た。しかしジャージを取りに教室に入るとほとんどの生徒がすでに教室で待機していたため、なかなかの騒ぎになってしまった。トイレで着替えて教室に戻ると予鈴がなり響いた。

（まあ胸から腹にかけて血だらけだったからな。）

今はホームルームの時間で先生が来るのを待っている。クラスメイトたちがこちらをチラチラみてるため、非常に不愉快な気分になってきた。そこに…

「バシッ！！」

「ヨッ！！殺人犯！今日は何人殺った！！」

クラスメイトで悪友でもある大剛寺堅^{ダイゴウジケン}が背中を叩きそう言った。

「っ、コノッ！」

オレは右に振り返り向き右肘を大剛寺の鳩尾に叩きつけた。

「ガッ！くっ」

大剛寺が痛みから背中を曲げ後ろに後退した、オレは右足を軸にそのまま振り返りながら左拳を大剛寺のこめかみに放った。

「バキッ！！」

左拳に微かな痛みが走る、そして

「ドガガガ！！」

大剛寺が机をなぎ倒して床に転がった。

「ツクウゝ、… テエンメゝ、… 殺す気か！鳩尾に肘たたき込んでこめかみへの一撃はヤベエーだろ！！」

「… 普通のヤツならな…。でも、お前はもうしゃべれてるだろうが！テエメの体の方がヤバいんだよ！！！」

オレと大剛寺はオレの親が夫婦で運営している格闘技道場の門下生だ。大剛寺はとにかく体が丈夫だ、だからオレは大剛寺に対する攻撃には加減を知らない。

「くそー、人がせつかく元氣付けてやろうと思ったのによー」

「あれでか！！殺人鬼がか！！」

「元氣出てきただろ。良かった良かった！はっはっは！！」

大剛寺の性格は知ってる、あの空気の中中心人物に声をかけれるヤツも少ないだろう。コイツは良いヤツだが無神経なところが玉に瑕だ、しかし本当に頼りになる一面も持っている。だからこそオレの数少ない悪友の一人だ。「…で、今日はどうした？まさか本当に人刺したわけじゃねえだろ。」

オレが冷静になるのを待っていたかのように今度は普通に声をかけた。

「…猫が跳ねられていたからな、…そいつを神社まで運んでやつたんだよ」

オレはそう言う自分の席へ向かった。

「はあ？…全くお前ってヤツわよー。…みんな聞こえたな！これ以上変な目で見えるんじゃないぞ！！！」

ガラガラゝ

「何の騒ぎだ。また大剛寺か？」

大剛寺が言い終わると同時に担任の田原先生タハラが教室に入ってきた。

「先生、またって何ですか！」

「長谷もつ着替えたのか。副会長殿から聞いているぞ。」

大剛寺を無視してオレにそう言ってきた。

『副会長？』

オレと大剛寺の声がハモってしまった

「…副会長って…。何を聞いたんですか？」

何となく副会長の名前が佳奈って言いそうだな～と思いながら聞いてみる。

「ん？学校に来る途中で猫を助けたんだろ？それで服が汚れて、今日はジャージで過ごすことになるはずだからその許可を下さい。って副会長殿が直々に言いに来たぞ。」

（やはり佳奈が副会長か…。それにしても許可って必要なのか？）

「副会長って誰なんです？」

オレがあえて聞かなかった事を大剛寺が代わりに聞いてくれた。

「…大剛寺。生徒会メンバーの顔と名前ぐらい覚えておけ！」

田原先生が疲れた様子で肩を落とした。

「副会長は3年の和宮佳奈だ。ワミヤカナ和宮神社の娘さんだ。」

（やっぱりか…。名字は和宮か…。）

「へー…。ちなみに何組ですか？拓磨との関係は！？」

大剛寺がこちらを見ながら田原先生に詰め寄る素振りをみせる。オレに殴られた箇所はもう大丈夫のようだ…

「大剛寺、馬に蹴られたくないなら席に着け。それでも来るなら跡継ぎの屍を超えて来い！」

（……）

田原先生がオレの方を見て大剛寺に言った。

「…田原先生…。そいつはキツイ冗談だぜ」

大剛寺くるりと反対を向き自分の席に戻っていった。

「おい長谷、流石は跡継ぎだな！お前の名を出せば泣く子も黙る大剛寺ラガイ羅凱の息子も裸足で逃げ出すぞ。はっはっは！」

田原先生はオレの肩を叩きながら勝ち誇っていた。

「田原先生、そういう言い方オヤジさん嫌いだと思いますよ。…オ

レモイヤですしね。」

オレは田原先生の手を避け自分の席に戻った。

「あ、ああ。ホームルームを始めるぞ、日直号令！」

少し慌てた様子で日直に号令を掛ける。大剛寺のオヤジさんはこの町じゃなかなかの有名な人だ。お袋の話じゃオレの親父とお袋を賭けて獅子乱闘を繰り広げ、親父達の世代では知らぬ者は居ないと言うほどの大事件を起こしたらしい。

「きりーっ、…きょーっけ！礼！」

そしてホームルームが始まった。

（オヤジさんが怖いなら言うなってんだ…。ふうー。…オレが強い、か…。…クソッ！！）

「ガンッ！」

オレは無意識に机の脚を蹴ってしまい何人かがこちらを振り向いた、だがすぐに向き直った。

（…大剛寺の行動もたまには役に立つな…）

そしてオレはいつしか机にうつ伏せとなり意識を失ってしまっていた。

第2話：恩返し（後書き）

輪廻の終演、第2話です。イメージはあるのですが上手く形に出来ず、手こずっています。まだまだこれからなので頑張って行きたいです。

第3話：過去の記憶

真つ白な風景、どこことなく現実とは違う雰囲気、感覚のほとんどが無くなったと思わせる無力感。

（ああ、これは夢だな…）

オレは夢に気づける時がある。しかし、気づけるだけでどうすることも出来ない、あえて言うなら傍観者となり夢の行く先をただ静かに眺めるだけなのだ。…夢は自分が体験したことなどの記憶を元に見ると言う。この夢も、今から数年前に起きた、オレの過去の記憶だ。

（…久しぶりだな…）

「…オイ！大剛寺！」

数年前のオレは大剛寺に対してかなり強気な態度で接していた。

この頃のオレはまさに天狗だった、格闘技を小さい頃から習っていたオレに喧嘩で勝てるヤツは居なく、同じく小さい頃から格闘技をしていた大剛寺は今とは違い控え目な性格だった。学校で唯一オレに勝てると言われたが一度も喧嘩をしたことが無かった。オレと拳を交わす時と言えば道場の試合だけだった。

「…何だよ、拓磨。また試合のことか？」

大剛寺は相手にするのもイヤだと言わんばかりにそう言った。

「何だよ！テエメがマジでやんねえーから言っただろうが！！！」
教室中に響き渡るほどの大声でオレは大剛寺に怒鳴りつけた。

「真面目にやってるだろ。拓磨の方が強いからそう見えるだけだよ。」

大剛寺は特に気にした素振りも見せずにそう言いオレから目を逸らした、オレの頭に血が上るには十分な行動だった。

「ッ！！コンやろー！！！！！！」

オレは大剛寺の横面を体重を乗せた拳で殴りつけた。

「ゴンッ！」

「ドガガガガガ！！！！！！」

大剛寺は机をなぎ倒し床を転がった。頭は額が割れ血が流れだしている、それでもオレは殴り掛かった。マウントを取り、回転をかけた撃鉄のような掌底を傷口に打ち込む。

「ガンッ！」

掌底を受け頭が床にぶつかりバウンドする。普通のヤツならそれだけで決着はつくはずだ、しかし大剛寺は違う。

「何してるんだ！！！！」

そこに騒ぎを聞きつけた先生がきて、オレを羽交い締めにした。それでもオレは大剛寺を蹴り上げ罵声を上げた。

…それからしばらくしてお互いの親が来た、オレはさんざん説教やら平手やらを受けた。しかし、その時のオレには何の意味もなかった。そして、その頃大剛寺が大事に飼っていた猫を連れ去り、置き手紙に深林に来るように記した。

「…やっと来たか！」

オレは倒れた大木に座り大剛寺を待っていた。オレが大剛寺の割れた額に掌底を打ち込んだことで血が止まらなくなり、病院に行っていたらしい、頭に包帯を巻いていることとかかった時間からして数針縫っているかもしれない。家に帰り手紙を見て急いで来たようだ。

「…ミケはどこだ」

ミケは大剛寺の猫の名前だった。この時のオレはやっと大剛寺と戦えるということに喜びを感じていた、そして大剛寺を本気にさせようと思った。

「くくく、猫が欲しければ、オレを倒してみろよ！はっはっは！早くしないと死んじゃうぞ。イヤ、お前の来るのが遅かったからもう死んじゃったかな？はっはっは！！」

何が楽しいのか。傍観者として過去の自分を見ると吐き気さえ起こるようだ。なぜこんなにも戦いに飢えていたのか…

「ミケはどこに居るんだって聞いてるんだ！！！！」

そんなオレの笑い声をかき消したのは大剛寺の怒鳴り声だった。この時の大剛寺は大声を出すことすらなかった、それが怒鳴り声を上げたものだからその時のオレには最高の興奮を与えてくれた。

「はっはっは！！！！やつと本気になったか！！ミケならその辺に埋まってんじゃねえか？オレを倒して探すことだな！！！！ひゃっはっは！！！！！！」

「ー。」

この時オレは大剛寺が初めてキレた瞬間を目の当たりにした。そこには、寒気を感じるほどの殺気と後ずさりしてしまうほど殺意に満ちた黒い眼があった。

「ーッ！！あ、あ、…」

その時オレは初めて恐怖を知った。ただ怖い、それだけだ。長年格闘技を習ってきたオレには拳を交わさずとも大剛寺の力量が分かってしまった。オレは完全に大剛寺に吞まれていた。

「ー！ッコノ」

しかし、この時のオレは自分の強さに絶対の自信があった。そして大剛寺に対する怒りもあった。故に、オレは動き出すことが出来た。（大剛寺が構える前にオレの最強の技を打ち込む！！！！）

オレはまだ知らなかった、何の構えもしないただ棒立ちになっていることこそ大剛寺の構えなのだと言うことを…。

「ハアッ！」

オレは無防備な大剛寺の右腹に拳を打ち込もうとした、そのあと長谷流の突きを打ち込もうと右手に拳を作りもしていた。しかし、意味がないことだった。オレは踏み込んだ瞬間顎を貫かれていた。脳

を揺らされ意識が朦朧とする、オレは顔への攻撃はほとんど食らったことがなかった。故に圧倒的に打たれ弱かった。

「……っ！……な、何だ！なんで、……あの無防備な状況から……的確に顎へ打てるんだよ。」

オレは立っていることもやっとだった、大剛寺が追撃してれば負けは確実だった。しかし、大剛寺はこちらに来ようとはしなかった。「ヘッ！余裕かよ。」

大剛寺は全く構えをとらず攻撃をし、動作の流れさえない単発でオレを殴った、これは無形と言えよう。格闘技の粹に捕らわれず流れや型を無視して相手にカウンターをいれる戦い方、大剛寺羅凱が得意とした戦法だ。しかし、これには常人離れた瞬発力と反射神経が必要となる。大剛寺はまさに天武の才を持っていると言えよう。

「くそが……！」

オレはデタラメに拳や蹴りを繰り出した。しかし大剛寺は全て払い、オレのこめかみに拳を叩きつけた。

「バギッ！」

ガサッ！

オレは地面に両手をついて倒れた

「ガッ！ああ……く……ハア……ハア……」

脳を直接殴られたような痛みが走り、意識を保つだけで精一杯だった。

「……ミケはどこだ」

大剛寺は静かにそう言った。オレは自分の負けを痛感し、今まで大剛寺に勝ち誇っていた自分が馬鹿馬鹿しくなった。

「……ハア……ハア。……その、……木の後ろに……、居る」

オレはミケを箱の中に閉じ込め、オレが座っていた大木の後ろに置いていた。オレはそう言う自分の不甲斐なさに涙を流し、その場に倒れた。

オレは目が覚めると病院のベットに居た。周りには誰も居なく一人

ベットに寝ていた。

(…何で此処に居るんだ…?)

オレは深林で気を失ったはずだった。おそらく大剛寺が運んだのだろ…とオレが考えていると

「カラカラカラ」

病室のドアが開いてガタイの良いおっさんが入ってきた。

「おおー！！起きたか坊主！！みんな心配してたぞ！！」

大剛寺のオヤジさんがドスドスと地鳴りを響かせオレに近づいてきた。

「……………」

オレはオヤジさんの方をじっと見て何をされても良いように身構えた。

「ん？何だ、そんな身構えんでも何もせんわい！」

オヤジさんはがっはつはつと面白そうに笑った。オレはそれでも構えないわけにはいかなかった。

「…何ですか？」

「ん？」

オレはボソッとそう言った。もう目を合わせる気力もない。天井を見上げ、このあと起こることを想像し身を固めた。

「はっはっは！！坊主！ワシは何もせん！と言ったろが！坊主ぐらいのガキは、気に食わん事があれば喧嘩ぐらいして当たり前じゃ！がっはっは！！」

オレが身構えたことがよっぽど面白いのか、オヤジさんは豪快に笑った。「ツ！！で、でも！オレは…ミケを人質にしたんだ！それで大剛寺と戦ったのに、それでも…」

オレは起き上がりオヤジさんに食い下がった。

「坊主。ガキがそんなことでうじうじしてんじゃねえぞ！堅に負けて悔しい！次は勝つ！！ってぐらいの意気込みを見せてみる！！だいたい堅だって最初から強い訳じゃないぞ！堅はお前に勝ちたい！って涙流してワシに言ってきたんじゃぞ！それから数年間、長谷道

場とワシの二重特訓じゃ、天狗に成り下がったお前に勝てる訳なかるうが！がっはっは！！」

オヤジさんはオレの胸板を叩きながら盛大に笑った。オレは啞然とした、そうしていると病室のドアがまた開いた、今度はオレの親父が入ってきた。

「拓磨、気がついたみたいだな……」

親父はそう言うとおレの頬を平手で叩いた。

「バチン！！！！」

「ーッ！」

ベッドから転げ落ちそうなほど強烈な平手だった。

「おいおい真無^{しんむ}そう怒らんでも良いだろう」

「そう言う訳にはいかん！！拓磨！！！！お前は何がやりたいんだ！お前を鍛えているのは、こんなことをさせるためじゃないぞ！！！！」

冷静沈着な親父が場所を気にせず大声を出したことに羅凱のオヤジさんも驚いていた。

「おい真無、落ち付け。病室だぞ。」

羅凱のオヤジさんが親父の肩を握りなだめる。オレは頬を叩かれたことよりも、大剛寺に負けたことよりも、羅凱のオヤジさんが言った真実の方が、オレには遥かに痛かった

「……オレ、……戦う前から負けてたんだ……。うっ、ッ……。」

オレは下を向き涙で濡れた顔を隠した。でも声だけは隠しようがなかった。

「坊主、悔しいか？堅に負けて悔しいのか？」

羅凱のオヤジさんはそうオレに質問した、しかし涙声になっているオレには首を振るしか出来なかった。

「……拓磨、悔しくないのか？」

親父が幾分か落ち着きを戻し聞いてきた。

「……くやしいよ、……でも、喧嘩に負けたことより、……大剛寺に越されたことが悔しい！！」

オレは涙を拭き親父を見つめた。親父は何も言わなかった。

「…オレはまだ弱い！心も技も体も全てが負けてる！！親父！オレを鍛えてくれ！！こんなことは一生やらないから！！お願いだ！！！！」

オレは頭をベッドに叩き付けて、そう言った。

「……」

親父は何も言わない。その沈黙が何を意味するのか、そのときオレには考えることも出来なかった。

「…真無、やってやれよ！坊主はまだ負けてないぞ！お前はここまで良いのかよ！」

羅凱のオヤジさんはそう言うつと親父の答えを待った。

「………何と言われようと、拓磨は長谷流剛の拳から破門させる。」

「

「えっ！！」

オレは目を見開き親父を見上げた

「真無！」

「何も言うな羅凱！コイツの責任だ、力に溺れる者に剛の拳は無用！！」

羅凱のオヤジさんを制止して親父は言った。

「………くっ！」

オレは悔しさで一杯になった。大剛寺の強さが分かり、オレはやっと本気になれると思った、その矢先にこれだった。

「………じゃあオレは剛の拳を辞める！それで今回のケジメになるのなら！！」

オレがそう言うつと親父を見ると親父は羅凱のオヤジさんを見た。

「ん？オレか？オレは何とも思つたらんと言つとるだろが！別に辞めんでええわい。」

「羅凱もこう言ってるし、辞めることで今回の件は白紙にしよう」
オヤジさんの言ってることと少し違うが親父が許すと言っているの
でオレは何も言わなかった。

「…親父、オレは剛の拳を辞める。」

オレはもう一度言った、親父は頷くだけだった。

「…でも、長谷流は辞めない！…オレは柔の掌を習う！…」

長谷流には2つの流派がある。1つは親父が教える剛の拳、もう1つはお袋が教える柔の掌である。親父の剛の拳は言うなれば力、対するお袋の柔の掌は技と言ったところか。相手の力を利用して攻撃する、合気みたいなものだ。そして親父はオレがそう言うとなんか分かってたのか、オレが言い終わると。

「それは母さんに聞くことだ。俺では答えられん。」

と、言って病室を出て行こうとする。

「お、おい！どこ行くんだ！一緒に居てやらんのか！」

羅凱のオヤジさんが親父に言う。

「小夜子と替わってくる。心配していたし、何より拓磨も早く答えが知りたいようだしな。」

お袋は今道場で稽古をつけているらしく、親父と替わらなければ病院に来れないみたいだ。親父は白紙にすると聞いたが、本当にもう忘れてしまったかのような態度だった。

「オレはもう平気だよ！自分で言いに行くよ！」

オレはそう言って立とうとしたが足に力が入らなかった。

「…無理するな。それに退院できるかどうかは、医者が決めることだ。しばらくそこで寝てろ。」

親父は言い終わるとすぐさま病室を後にした。

「全くアイツは…。」

羅凱のオヤジさんはお袋が来る前に退散すると言って病室を出て行った。…た…ク…マ…！……

…現実の方で誰かがオレを起こしているようだ。もうすぐ夢も覚めるだろう。余談だが、この後お袋が来て二度と喧嘩をしないことを最低条件とし、いくつか条件を付けられ入門を許可された。

（…本当、懐かしい夢だったな。オレが忘れてはいけないう過去の過去…）そしてオレは長い夢から覚めたのだ。

第3話：過去の記憶（後書き）

「輪廻の終演」第3話です。過去話を書きましたが、何故か長くなつてしまいました…。今3話まで投稿しましたがこの作品の出来について感想・コメントをして頂けたらと思つてます、面白いと思つて読んで居るのか知りたいのです。今まで1度もコメントがないので創作意欲が減少していますので、よろしくお願いします。

第4話：運命の夜

体は睡眠を欲していた。それでもオレは微睡みながら辺りの様子を伺おうとした。

（……スウ……）

しかし今までの深い眠りのせいで未だ覚醒仕切れていなかった。

「……スウー。拓磨！！！！！！起きろ！！！！！！」

教室の窓が震えるほどの大声で大剛寺が叫んだ。

「……」

オレは慌てて耳を塞いだが意味がなかった。

「やっと起きたか！もう放課後だぞ！」

「ッ、このヤロ。鼓膜が破れるだろが！」

オレは耳鳴りがする頭を押さえながら大剛寺に詰め寄ったが、大剛寺は特に気にした様子はなかった。

……オレが剛の拳を破門されてから大剛寺と正式な試合をしたことはない。大剛寺は自分のせいだと言って謝りにまで来たが、そのあと数日間、学校を休んで羅凱のオヤジさんに何かいろいろと叩き込まれたらしく、数日して学校に来たときにはかなり明るいヤツになっていた。それから数年で周りから無二の親友だな、と言われるほどオレたちは仲良くなっていた。そして今では朝方のようにじゃれあうことも少くないのだ。

「お前がいくらか起こしても起きないからだろ！クラスの連中はみんな帰ったぞ！」

大剛寺はそう言って辺りを示す。

「……」

オレは辺りを見渡して時計を見た。すでに下校時間を大きく過ぎていた。

「もっと早く起こせ！！つか昼起こせよ！」

「お前がいくらか叩いても起きなかったんだろ！田原も呆れてたぞ！」

「デエメー！人が寝てると思って殴りやがったな！！」

大剛寺ははあく、と溜め息を吐いてパンを投げてきた。

「…あんパン？」

「寝てても腹は減るだろ。昼買ったんだよ。」

大剛寺はそう言うつと教室を出て行こうとした。

「おい大剛寺！ドコ行くんだ」

「あ？道場に決まってるだろ。拓磨もさっさと来いよ。」

「そうじゃなくて、コレだけか？飲み物はどうした。」

オレがそう言うつと大剛寺はまたはあく、とため息を出した。

「買ってやってるだけマシだろ。あとは行きがけに買えよ。」

大剛寺は早くしろ！とオレを急かした。昔の控えめな性格は微塵も見せていない。夢を見たせいで昔の大剛寺と今の大剛寺を比べてしまっている自分がいた。

「……あ、大剛寺。オレ今日道場休む、お袋に伝えておいてくれ！」

帰りに神社に寄ると言ったのを忘れるところだった。

「は？何でだよ。あとで怒られるぞ」

「…イヤちよつと神社に寄るからな。」

「神社？朝のことですか？…朝のこと伝えて良いのか？」

「ああ、頼む。」

大剛寺は頷くとすぐさま教室を出て行った。オレを起こすのに時間がかかったのだろう、もうすぐ稽古が始まる時間だ。

「…オレも行くか。」

そう呟いて、あんパンを食べながら教室を後にした。

「…ん？あの人は。」

校門の近くの大木に寄り本を読んでいる女子生徒がいた。オレはその生徒に近づいて言った。

「…朝はどうも。着替えも間に合いました」

すると女子生徒、佳奈がこちらを振り向いた。

「やっと来た。…あと授業は真面目に受けるべきよ、後輩君。」

佳奈は読んでいた本を閉じカバンに入れながらそう言った。

「…オレを待つてたんですか？」

「今日家に来るんでしょ？どうせだから一緒に行こうと思って待つてたのに全然来ないし。それで、あなたのクラスの人が居たからもう帰ったか聞いたら朝からずっと寝てるって言われたわよ」

佳奈がこちらをジッと睨んできた。

「えっと、いや、ははは…。すいません。」

オレは佳奈に頭を下げた。オレは何故か佳奈に頭が上がりたようだった。

「ふゝ。まあ良いけどね。私もたまに寝ちゃうことあるし。」

「…副会長が寝てて良いんですか？」

オレがそう言っていると佳奈はまたジッとこちらを見てから校門を出て行くとした。

「…怒りました？」

「いいえ。そんなことはありませんわよ」

オレが聞くとそう即答した。オレはふう〜とため息を吐き出して佳奈の横に並んだ。

「怒ってないなら隣良いですよね？」

「…好きにしたら」

佳奈はぷいっと顔を横に向け歩き出した。オレもそれに合わせ歩き出した。

「…神社の階段つて、…こんなに、長かったのか…。」

オレは今和宮神社の境内に向かうため、階段を上っている。

「何してるのー、早く来なさい。」

佳奈が境内の方から呼んでいる。オレはまだ半分ほどしか進んでなかった。

「…すぐ行きますー！」

（な、何でだよ！いくら歩き馴れたって言っても、オレもそれなりに体力はある。それなのにこの圧倒的な差は何だ！）

「くそッ！…ふうー、ハッ！」

オレは気合いと共に全速力で階段を駆け上がった。

「ハア…ハア。…到着。フウー、フウー…」

オレは呼吸を整えて佳奈を探した。

ミャー

「ん？」

すると足元から聞き覚えのある鳴き声が聞こえてきた。

「おう、お前か。神社生活はどうだった？」

オレはそう言っ子猫を抱き上げて、神社の裏側の方に向かい歩き出した。

「…あ、やつと来た。」

神社の裏側に行くとか佳奈が猫たちを撫でていた。周りを見渡すと十数匹は居るようだった。

「いっぱい居ますねー。15匹ぐらいですかね。」

オレがざっと数えて言ってみると佳奈は首を振った。

「その子猫ちゃんを抜いて、全部で24匹居るわよ。」

「24…多いッスね。」

ここに居る以外にもまだ居るようだ。

（ここだけでも猫の集会所になっっているのにまだ居るのか…。）

オレは啞然としながら辺りを見渡した。

「…何？お母さん探してるの？」

オレがキョロキョロしていることに気がついて佳奈がそう言った。

「はい。コイツを預かってもらっていたからお礼をと。」

「お礼ね。別に良いのに、そんな気にしなくても。…その子連れて帰るの？」

「一応そのつもりでしたけど…。うーん。」

「…あら、帰ってたの。お帰りなさい。」

辺りを見渡してオレが考えていると佳奈のお母さんがやってきた。

「ただいま。」

「お邪魔してます。」

オレは佳奈のお母さんに頭を下げ挨拶した

「いらつしゃい。…その子良く懐いてるわね。羨ましいわ。」

オレが子猫を抱いているのを見てそう言った。佳奈の周りにいた猫たちは佳奈のお母さんが現れると一斉に佳奈のお母さんの方に集まっていた。

「…まさに猫たちの女神様ですね。」

その光景を見てオレはそう言った。

「ふふふ、ありがとう。でも、女神様って年じゃないわね。」

「いえいえ、まだまだ現役の女神様ですよ。一児の母には到底見えませんよ。」

オレはそう言って抱えていた子猫を下ろした。しかし、他の猫たちと違い佳奈のお母さんの方には行かず、オレの足にくっついていいる。「ふふ、ありがとうございます。お世辞でも嬉しいわ。」

「お世辞じゃないですよ、本当のことを言っただけです。」

「どうでも良いけど私のお母さんをナンパするの止めない？」

佳奈がオレの横に現れそう言った。

「あら？ナンパだったんですか？私ドキドキしちゃいますよ。ふふ。」

佳奈のお母さんは冗談っぽくそう言つとニコニコしていた。

「お母さん！…まったく。…で、後輩君は子猫ちゃんどうするの？別にここで飼っても良いのよ。」

「…うーん。お袋は家で飼うのに賛成してくれるだろうけど、親父が何て言うか…。…それと自己紹介がまだでしたね。オレは長谷拓磨です。」

ずっと後輩君と言われているので、あえて自己紹介をした。

「知ってるわ。長谷道場の跡継ぎ君でしょ。」

佳奈は特に気にした素振りを見せることなく母親の周りにいる猫を

撫でてる

「ふふ、小夜子さんと私は同級生何ですよ。」

すると今度はお母さんの方がそう言った。

「そうなんですか。…え？…そうだったんですか！！」

佳奈とオレの年が近いのだから全然おかしいことではないのだが、オレは驚いた。

「いや、お袋より全然若いですよ。」

とりあえず思ったことをそのまま言つと。

「ふふ、ありがとうございます。でも小夜子さんもお若いですよ。」

佳奈のお母さんが微笑みながらそう言った。

「…で！どうするの？拓磨君？」

そこに佳奈が母親と違った笑みを浮かべながら聞いてきた。

「えつと…」

オレは子猫の方を見た。オレの足にくつついてこちらを見ている。

もう離れたくないと言わんばかりな顔をされてはどうしようもない。

「そうですね、…連れて帰ります。」

オレは子猫を抱き上げた。爪を立てることもなく腕の中で丸まった。
ミヤー

「ふふ。猫さんも喜んでる見たいね」

佳奈のお母さんがそう言つて子猫を撫でた。

「本当、良く懐かれてるわね。羨ましいわ」

佳奈はそう言つて笑顔を見せてくれた。

「今日はこの後どうするんですか？よろしければ晩御飯を家で食べていきませんか？」

一通り雑談を交わした後に、佳奈が晩御飯の支度をすると言い自宅に戻ってから、佳奈のお母さんからそう言われた。

「えつ。…それはさすがに…。コイツも居ますから家で食べますよ。」

オレの腕の中で丸まり寝ている子猫を示してそう言った。だが正直言って家に帰っても何も用意してない、その上佳奈のお手製料理を食べれるということなのでかなり魅力的なお誘いだった。しかし、子猫のことではいろいろお世話になっているのでこれ以上迷惑をかけるのは気が引けたのだった。

「でもご自宅に帰っても何も用意してないのでしょ？」

「え……」

オレが何でそれを？と考えていると。

「ふふ、小夜子さんが良く言っていましたから。稽古が忙しくて子供にご飯を作るヒマもないって。けっこう責任を感じていましたよ」
佳奈のお母さんは遠慮なさらず、とオレを自宅に引っ張っていった。

トントントン

リズム良くまな板を叩く音が聞こえてきた。

（なんだか久しぶりだな、こういうの。）

確かにオレが小さかった頃はお袋が食事の用意をしていた、しかしオレが大きくなると、自分の門下生の稽古に忙しくなり、最近では台所で見ることがなくなった。稽古は朝、夕、夜の3つの部に別れているため、お袋たちが家に居る時間が短いのだ。オレと大剛寺は学校がある日は夕の部なので夜は自分で用意しているのだった。それでも、朝はお袋が用意してくれているので感謝である。

「ん？あれ？拓磨君？どうしたの？私に用事？」

佳奈が手を止めてこちらに振り向いた。

「ふふ、佳奈ちゃん。今日は拓磨君も晩御飯を御一緒することになったから。腕によりをかけて作らないとね。」

佳奈のお母さんは楽しそうに笑ってオレを居間に案内した。子猫は佳奈のお母さんが用意してくれた小さな力ゴの中で丸まって寝ている。起こさないようにそつと居間まで連れ行った。

「拓磨君、お家の人に連絡しなくて良いの？」

佳奈がこちらの方に向かい言ってきた。

「たぶん大丈夫です。夜はいつも自分で用意していますから。」

「あら、拓磨君お料理出来るの？」

佳奈に対して言ったことに佳奈のお母さんが興味津々と言わんばかりに聞いてきた。

「まあ簡単なヤツなら少しは出来ますけど……。」

確かに作ることは出来るのだが、面倒くさいので大抵は作り易く手間がかからない数種類をローテーションしているだけなのだ。

「じゃあ、おばさんも佳奈ちゃんのお手伝いをしましょうかな？」

佳奈のお母さんはそう言って巫女服を着替え台所に入って行った。

「あれ？お母さんどうしたの？」「佳奈のお手伝いよ。拓磨君いるから腕によりをかけないとね。」

台所の方であれこれ話声が聞こえてくる。席に案内されたがじっとしとくのもヒマだ。

「……あの、オレも何か手伝いましょうか？」

「ん？拓磨君はお客さんだから良いよ。子猫ちゃんと遊んであげて。」

佳奈が台所の方から顔を出して何故か上機嫌でそう言いまた台所に戻った。これ以上声をかけるのはかえって迷惑になりそうなのでオレは大人しく料理が出来るのを待った。

『お待ちとおさま』

佳奈のお母さんが台所に向かってからいくらか時間が過ぎ、オレの腹も減ってきた頃に2人が料理を持って現れた。

「……何か多くないですか？」

2人が並べる料理は明らかに4人分を超えていた。軽く見積もっても10人分ぐらいありそうな勢いだ。「あはは……お母さんと一緒に作るの久しぶりだったからつい……。まあ、拓磨君は男の子だから大丈夫よね。」

（いや、大丈夫よねと言われてもこれは難易度が高いですよ……！オ

ヤジさんが大食いなことを祈るか…)

「でも本当多いですね…。あれ？オヤジさんは呼ばないんですか？」

佳奈と香苗さんが向かいの席に腰を下ろしたのでそう訪ねた。

「え？お父さんは今日居ないよ。お母さんに聞いてないの？」佳奈がそう言い香苗さんの方を見た。

「あら、言ってなかったかしら。」

香苗さんは首を傾けてオレに聞いてきた。

「聞いてませんよ。…3人でこれ食べるんですか？」

(さらに難易度アップ)。くそッ！うまそうだけどこれだけあったら微妙に引くぞ！…残すわけにはいかんし…。がんばれオレの胃袋！)

オレは心の中で気合いを入れた。

「とりあえず食べましようか、食べないことには減らないですし。」

オレはそう言っ2人を見た。

「そうね。冷えるし、早く食べましよう。」

佳奈と香苗さんが手を合わせたのでオレもそれに合わせた。

『いただきます。』

3人の声がきれいに重なった。

「ふー。もー無理です。」

オレは並べられた料理をきれいに平らげ、そう言った。

「お粗末様です。後片付けはしなくて良いから休んで。」

佳奈がそう言い皿を片付ける。オレは1人で6人分近く平らげ、椅子と同化していた。でも意外に2人とも良く食べてくれたのでオレの負担も軽くなった。

「ありがとうございます。…料理美味しかったですよ。特にあのムニエル、独特な味で美味しかったです。」

「ふふん。私の特製ムニエルがお気に召しましたか。お母さんに習

って私がアレンジした私の特製よ。私が唯一お母さんに勝てる料理なの」

佳奈は自慢げにそう言って台所に入って行った。

「佳奈、後片付けはお母さんがするから拓磨君を送って上げなさい。」

佳奈が台所に入ると香苗さんがそう言った。

「え、良いですよ。そんな、ご馳走にもなっているんですから。」

オレは慌てて手を振り、申し出を断った。

「ハイ。じゃあ後はよろしくね。」

しかし、佳奈はオレを無視して香苗さんにそう言つと部屋に戻り、着替えてから現れた。

「じゃあ行きましょう。」

「いや、1人で大丈夫ですよ。そんな……」

何事もなかったように佳奈が言ってきたのでオレはまた断ろうとした。

「拓磨君、これ付けて行きなさい。魔除けの護符が入っているから。」

そこに、香苗さんが御守りを持って現れ、オレの首に御守りをかけてくれた。

「え？ありがとうございます。……って、そうじゃなくてオレの話を……」

「ほら、置いて行くわよ。」

オレの話を全く聞かず佳奈が子猫が寝ているカゴを持って玄関に向かった。

（ふ、まあ良いか。そんなに遠いわけでもないし……）

オレは香苗さんに挨拶をして佳奈のあとを追った。

「遅いぞ。」

オレが佳奈を追い、玄関を出ると佳奈は子猫を抱いて待っていた。
「すみません。」

オレはとりあえず謝り、佳奈から子猫を受け取った。そしてオレたちは境内を後にした。

ミャー

子猫はオレの腕の中に収まり、嬉しそうに鳴いていた。

「はあゝ、羨ましいなゝ。」

子猫の嬉しそうな鳴き声を聞いて佳奈がそう嘆いた。

「私あんまり猫ちゃんに好かれないのよね…。お母さんは好かれてるのに不公平よ！」

神社の階段を下りながら佳奈がそうオレに言ってきた。

「んゝ、でも、オレもあんまり猫に好かれてとは思いませんよ。

ああ、コイツは別ですけど。あと…香苗さんは好かれてと言うより、んゝ、何て言えば良いかな、もつと特別な…崇められてるみたいな感じがしますね。」

オレがそう言うのと佳奈はうーん、と考えオレに言ってきた。

「…確かにお母さんは昔から動物、特に猫ちゃんに好かれていたわね。」

「…まあ、あの様子からしてそうでしょうけど。」

オレは夕方のことを思い出し、そう言った。

「裏庭のこと？…あれいつものことだから、普通に感じるのよね。」

「普通じゃないですけどね、あれは…。」

ミャー

オレが苦笑いしながら佳奈に言うのと子猫が反応し鳴いた。

「お前もそう思うのか？」

ミャー

子猫はもう一度鳴くと、オレの胸元辺りを引つ掻いた。

「痛ッ！痛いぞ。…ん？これか？」

オレが胸元から香苗さんにもらった御守りを取り出すと子猫は引つ掻くのを止めた。

「あれ？お母さんにもらったのそれ？」

佳奈が首を傾げながら不思議そうに言ってきた。

「はい。帰り際にもらいました。魔除けだとか。」

オレは御守りを掲げながら言った。

「知ってるわ、…ほら。」

すると佳奈が胸元から御守りを取り出し見せてくれた。

「小さかった頃にお父さんにもらったの。夜はお化けが出るってお父さんに言われて、私がすごく怖がったからお父さんがくれたの。」

この御守り、お父さんとお母さんが作ったモノらしくて普通の御守りとは何か違うのよ。」

「へー。そうなんですか？でも、それなら大切なモノじゃないですか。何でオレに…」

オレは御守りを見ながら呟いた。

ミャー

すると子猫が今度は佳奈に向かって鳴いた

「…御守り欲しいの？…少しだけね。」

佳奈が子猫に向かってそう言うと、子猫の首に御守りを結んだ。

「良いんですか？大切な物でしょう。」

「拓磨君の家に着くまでの間だけよ。拓磨君が抱いてるから無くすこともないでしょう。」

ミャー

子猫は満足だと言わんばかりに鳴いてまたオレの腕の中に収まった。

「…本当に御守り欲しかったのか？」

オレは子猫に向かってそう呟いたが子猫は特に気にした様子はなかった。

「この御守りは特別な物だから、惹かれたんじゃない？お父さんたちの思いが込められてる御守りだから。」

佳奈がどことなく感傷的に言ったため、オレはそれ以上言葉を続けることが出来なかった。

……
しばらく沈黙が続き、オレは何を話せば良いのか四苦八苦していると、佳奈が何かに反応した。

「…どうしました？」

「え…うん…。何か聞こえなかった？…何かイヤな感じがする…。」
オレが尋ねると佳奈は何か怖いモノを見たような、そんな怯える表情を見せた。オレは耳を澄まし、辺りの気配を探った。

「…、キーン、…」

耳を澄ますと大気の震えと共に何かを感じた。そしてオレの背中にイヤな汗が流れた。

（何だよ、この重く神経をマヒさせるような感じは！不安を誘うようなこの気配は！）

「拓磨君大丈夫？」

佳奈はそう言っただけでオレの腕を掴んだ。

「…あ。だ、大丈夫です！ちょ、ちょっと周りの気配を探るのに集中してて…。」

佳奈に気取られないようにと思ったが上手く言葉を繋ぐことができなかった。オレは進行方向である暗闇を見つめ、神経を尖らせ集中力を高めた。ミャー！

「うわっ！」

今まで大人しくしていた子猫がいきなり暴れ出してオレの腕から飛び出した。

ミャー！ミャー！…

「お、おい。どうした。…あっ！」

子猫がこれほど興奮したことは今までなかったことだったのでオレは驚き、子猫が見つめる暗闇の先に意識を戻した。その瞬間子猫が暗闇に向かってダツと駆け出した。

「た、拓磨君！」

「分かってます！」

オレは佳奈の声と共に駆け出した。佳奈もこのイヤな感じの発生源がこの先だと感じているのだろう…だが、行くしかない。

「佳奈は此処に居る！」オレは走りながらそう言い子猫の後を追った。

300メートルぐらい走っただろうか、全速力で走ったため酸欠気味になり、加えてこの空気の重さ、心臓が自分の物ではないかと思うほど激しく鳴り、胸は苦しいほど締め付けられていた。

「はぁ、はぁ…。この辺りだな」

オレは息を深く吐き辺りの気配を探った。

「…あそこか」

10メートルほど先にある空き地のような場所がどうやら根元らしい。オレの六感があの場所に行くことを拒否している。

「…、…、ふー。」

オレは目を閉じ意識を集中した。

「心を無に 技は鋭く 体は機敏」

オレはゆつくりと目を開けた。この言葉は昔羅凱のオヤジさんに聞いた戦いの心得で、オヤジさんが好む言葉だ。

「…行くか」

オレは神経を研ぎ澄ました。

――、――。

その場所は明らかに異質だった。大気が震える様が肌を伝って全身に伝わる。…何か居る、そう思わせるに十分な要素がここには漂っている。

（…アイツは何処だ？）

オレは子猫を探し辺りを見回した。

「……………居た！ッ！！」

子猫を見付け駆け寄ろうとした瞬間、凄まじい殺気がオレを襲った。

オレはとつさにその場から大きく横に跳躍した。
ー。

…オレが居たその場所には高密度な闇があつた。

「…なんだよ…あれは」

おそらくこの異様な気配の根元なのだと頭のスミでは分かっているが、それを認めることが出来なかった。

「…」

オレが体勢を整え身構えた瞬間、闇の塊が横に吹き飛んだ。

「！」

何かがまだ居ると、気配は感じないが分かった。形こそ分からないが闇の塊が飛んだ様は何者にやられたものだと分かったからだ。

オオオオオオオオオオ！！！！！！

瞬間雄叫びのような声が辺りを支配した。

「つくう！」

オレは反射的に耳を押さえた。

「！、しまった！」

（…えっ？）

耳を刺すような音の中、オレの正面から声が聞こえた。

「！！」その時、闇から人型の影のようなものが現れ徐々にその実体を現していく。

そして、それに合わせるようにオレの前に鎧を纏った剣士が現れた。

「な、何なんだ…。」

剣士は影が実体化するとともに影に向かって駆け出していた。手には月光を反射する美しい日本刀を携えて。

一瞬にして影の懷に飛び込み刀で影を切り裂いた。

影は後退し剣士との距離を広げようとしたが、刹那の瞬間剣士は影の懷に入りその体を真つ二つに切り裂いた。

「！す、すげー。」

オレはその一連の動きに完全に魅入らされていた。そして高まっていた緊張が揺らぎオレはその瞬間、動くことが出来なかった。

「……！」

「……ドンッ！」

オレの体は何かに吹き飛ばされていた。そしてオレを吹き飛ばした何かは、赤い液を撒き散らしながらオレがさっきまで立っていた場所に倒れた。

「……え？……は……は……？」

オレは自分の目を疑った。オレの体には特に外傷はない。……あの瞬間、剣士が影を切り裂くと二つに別れた影の内片方がオレに襲いかかってきたのだ。オレは避ける事も出来ず覚悟を決めたはずだった。

「は、はは……、何でだよ？……何で此处に……？……嘘、だろ……」

オレは震える体をそのままに何かの方に近づいた。視界の端では剣士と影がまだ戦っていたが、オレは何かから視線を外すことが出来なかった。

「………はは、………嘘、だよな……。……ッ……！」

オレは歯が軋むほど噛み締め自分の無力を呪った。オレの目の前には血まみれの佳奈が横たわっていた。その傷は素人の目から見ても絶望的だった。

「……トン。」

オレが物音に視線を向けると先ほどまで影と戦っていた剣士がオレの横に立っていた。剣士はオレには目もくれず、佳奈の横に膝をつき傷の状態を確認しているようだった。

「………すまない。」

剣士が佳奈に向かいそう呟いた。そして佳奈の傷口に手をあてて何かを呟いた。

「……」

「……う……！」

剣士が何かを呟いた瞬間佳奈と剣士の体が光に包まれた。そして光が消えると剣士の姿は何処にもなかった。

「…何だ。…か、佳奈…！」

オレが佳奈に近付こうとした瞬間、佳奈が上半身を起こし立ち上がるうとした。

「…だ、大丈夫なのか！」

オレは慌てて佳奈に駆け寄り手を伸ばした。オレの手が佳奈の肩に触れる瞬間オレの手は払われ空を掴んだ。

「…え？」

オレは佳奈に手を払われ唖然とした。姿形は佳奈本人だが、その眼光の雰囲気は明らかに違っていた。

「…お前、…佳奈、だよな？」

オレがそう言うのと佳奈はオレに今まで感じたことがないほど強烈な殺気をぶつけてきた。

「…。」

オレは息を呑んだ。佳奈から視線を外すことも出来ず、ただその時が過ぎるのを待っていた。

「…弱者が、…。」

佳奈がオレに何かを言いかけ、そのまま立ち去ろうとした。

「あ、ま、待ってくれ！」

一体何が起こったのか分からず、オレは戸惑ったがこのまま佳奈を行かせるわけにはいけないと残っている理性が告げた。

「…貴様は、私と話す資格があると思うのか？」

佳奈は振り向き様に再び凄まじい殺気をぶつけてきた。

「ッ。あ、ある！あ、アンタが誰かは知らんが！その体は佳奈の物だ！佳奈は！？佳奈はどこだ…！」

オレは自分でも何を言っているのか分からないが、飲み込まれる理性を必死で抑え感じるままに言葉にした。

「…貴様が探している者は貴様の前に居るであろう。…私が和宮佳奈だ。…臆病者が私に気安く話掛けれると思うな。」

佳奈はそう言うところりと回り空き地を出て行こうとした。

「あ、待ってく、ッ！」

オレが再び佳奈に声を掛け近付こうとした瞬間、今までで一番強く、恐ろしく、心臓を鷲掴みにされたと感じるほどの殺気をオレにぶつけてきた。オレはその場に立っていることさえ出来ず、数歩後ろに下がりそのまま尻餅をついた。

「……」

佳奈は何も言わずその場を去って行った。オレは胸にのしかかる様々な感情の波を受け、その場に両手をつき滲み見えない両眼を隠した。

「……………」

第4話：運命の夜（後書き）

3話を投稿してからだいぶ時間が空いてしまい、少し違和感を感じてしまう作品になってしまいました…。一応この話で第1章が終了です。第2章も頑張って書くので感想等をよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0679b/>

輪廻の終演

2011年1月25日08時45分発行